

研究課題名：Place-Based Education の現代的あり方に関する研究

【研究計画・目的】

研究の課題は「Place-Based Education の現代的あり方に関する研究」であった。我が国における野外教育の起源はアメリカにあるとされ、自然環境での実践的な教育を「科学」という切り口によって学術的な議論の俎上に導いた功績は非常に大きい。しかしながら、環境問題が全世界的な喫緊の課題として浮上している現代においては、自然を客体として扱う西洋由来の科学的知識体系や、二元論的自然観への懐疑が生じている。

このような問題意識のもと、本研究では、自然環境と先住民コミュニティの自然に関する知識体系等を尊重しつつ、野外療法や土地に根差した教育（Place-Based Education / Land-Based Pedagogy）を展開しているカナダを渡航先とした。具体的には、ブリティッシュ・コロンビア州のビクトリア大学（University of Victoria）を拠点とし、これら実践や理論の調査、ならびに関係する研究者との議論を通じて、野外教育やPlace-Based Education の現代的あり方について検討を行うことを目的とした。

さらに、特別推進研究における課題「野外、あるいはノイズの人間学的意義—野外教育における感性に関する探索的研究」とも連動させ、より具体的な目的として以下の3点を設定した。

①感性教育としての野外教育の可能性に関する理論的検討

②カナダ先住民のLand-Based Educationの理論的検討と①との比較検討

③①および②の知見の実践への適用と、感性教育としての有効性やプロセスの実践的探究とりわけ、西洋の二元論的な自然観とは根本的に異なる先住民の一元論的・関係論的な存在論やアニミズム的な世界観を理論的に再評価し、日本の野外教育学における新たな「メタ目標」としての可能性を提示することを大きな狙いとした。

【研究活動】

在外研究は、2024年4月16日に出国し、2026年2月27日に帰国するまでカナダにおいて実施した。主にブリティッシュ・コロンビア州のビクトリア大学を拠点として活動を展開した。

具体的な研究活動として、まず現地の文献調査および関連資料の収集・分析を精力的に行った。ニコラス・クラクストン氏らによるカナダ先住民のLand-Based Pedagogy（以下、LBP）の実践事例や、ヌー＝チャー＝ヌルス族における「Tsawalk（全ては一つ）」といった伝統的なコスモロジーについて検討し、人類学における「存在論的転回」の知見と結びつける理論的考察を行った。

また、理論研究にとどまらず、野外教育の実践的背景を体験的に理解するためのフィールド調査を実施した。ウィスラーやホワイトホースなどにある博物館、資料館、キャンプサイトをはじめとする野外教育関連施設やフィールドの実地踏査を行った。さらに、自家用車を用いた北米大陸横断調査を実施し、カナダの各都市を西端から東端に向けて巡り往復することで、各地の風土や文化の多様性、環境の諸相について体感的に理解を深めた。なお、当初想定していた先住民コミュニティにおける直接的な調査については、先住民研究における知

的植民地主義・文化搾取への懸念に配慮した結果、今回の研究期間内での実施は見合わせる
こととした。

これらの調査研究と並行して、野外療法に関する専門書籍『Outdoor Therapies』の翻訳・
監訳作業を進め、日本国内での出版に向けた活動を行った。

また、収集した知見を統合し、複数の学術論文の執筆および学術誌への投稿活動を継続的
に実施した。

【研究成果】

在外研究における主な成果は、翻訳書の刊行と2本の査読付き学術論文の発表、そしてそ
れらを通じた野外教育学の新たな理論的視座の構築である。

第一の成果として、書籍『アウトドアセラピーズ 実践入門 その可能性とまなざし』（ネ
ヴィン・J. ハーパー、ウィル・W. ドブド著）の翻訳・監訳を手がけ、2025年3月に刊行し
た。同書は、インドアにこもりがちな現代社会の背景を踏まえ、野外（アウトドア）を活用
した心理的・身体的支援の理論と実践、そしてLBPに根ざした先住民族の癒しの教育法など
を多角的に紹介するものであり、日本の野外教育および支援分野に重要な知見をもたらした。

第二の成果として、2本の論文が学術誌に掲載された。1本目は「野外教育実践が拓く大
学と地域の連携—感性の育みに資する生態学的な野外教育学を理論的視座として—」である。
本論文では、哲学者・桑子敏雄の感性の定義などに基づき、大学と地域の連携において極め
て重要な「感性」を育むための枠組みとして、生態学的な野外教育学の理論的視座を提示し
た。

2本目は「野外教育学におけるメタ目標としてのアニミズムの可能性—カナダ先住民の
Land-Based Pedagogy を端緒として—」である。本論文では、カナダ先住民のLBPにおい
て、西洋のアウトドアセラピーで使われる「Therapy（治療）」という用語が意図的に用いら
れていない点に着目した。西洋的なセラピーが自然を「人間の癒しのためのリソース（客体）」
とみなす道具主義的構図を持つ一方で、LBPは土地をそれ自身の視点と主体性を持つ「親戚」
と捉え、人間と土地が「癒やし、癒やされる」循環的かつ合一的な関係にあることを明らか
にした。

そして、「Tsawalk（全ては一つ）」という一元論的な存在論や、ティム・インゴルドら人
類学における「存在論的転回」の議論を援用し、自然を客体化する近代の自然の統制を乗り
越えるための関係論的な在り方としてのアニミズムを理論的に再評価した。さらに、LBPの
エッセンスを日本の野外教育に導入するため、岩田慶治の「カミ（あるがままの不意の出会
い）」の概念や、神仏習合をはじめとする日本独自の風土的アニミズムの基盤を接続した。
これらを通じて、環境からの働きかけを受け止める「受動的アニミズム（体験的・感性的ア
ニミズム）」と、それを具体的な保全活動等へとつなぐ「能動的アニミズム（論理的・倫理
的アニミズム）」の往還の必要性を提示した。

最終的な理論的成果として、個別の技術習得などの自由な「図（意識の焦点）」としての
活動目標の背後に、活動全体を支え意味づける「地（無意識的な深層）」としての「アニミ
ズム的感性の醸成」を野外教育の「メタ目標」として据えるという、新たな理論的枠組みを
構築することに成功した。

【今後の展望】

在外研究を通じて構築された「メタ目標としてのアニミズム的感性の醸成」という理論的視座は、人間と自然を切り離す近代二元論への根本的な問い直しであり、現代社会が直面する地球規模の課題に対する野外教育からの旧くて新しい応答となり得るものである。今後の課題は、この理論的枠組みをいかにして実際の野外教育実践へと具体的に展開・応用していくかである。

理論と実践の架橋に向けては、日本各地に残る伝統的かつ体験的な自然に関わる生活実践（衣食住、農林水産業、狩猟など）や宗教的儀礼（修験道や遍路など）に埋め込まれた身体知に着目し、それらをアニミズム的観点から野外教育にいかに導入し得るか、そのプロセスの研究を進める必要がある。その際、カナダ先住民の文化や儀式を表層的に「借用」することは、新たな知的植民地主義や文化の搾取に陥る危険性を孕んでいる。したがって、単なる模倣ではなく、自文化（日本）に息づく神仏習合などの思想的遺産を批判的に再検討し、近代的な主客二元論を「脱学習」するための足がかりとして活用していくという自己省察のプロセスが極めて重要となる。

これら枠組みや理論・実践における架橋の端緒として「神仏習合」に着目し、2026年7月の学会大会での発表を予定している。

また、今後の研究活動を支える外部資金の獲得に向けた準備も継続する。2026年度に応募し不採択（A評価）となった科学研究費助成事業（基盤研究C）「野外、あるいは『ノイズ』の人間学的意義—AI時代の野外教育に関する感性論的研究」について、2027年度の申請に向けて計画の再検討を進めている。審査において指摘された「学術的問い」に対する懸念や研究方法の改善点を踏まえ、感性概念を用いた問題提起の妥当性と論理構成を精査し、本研究で得られた理論を実践へと展開する研究手法の妥当性を厳密に吟味した上で、次年度の応募を行う予定である。

【教育への効果等】

在外研究で得られた成果は、本学における野外教育関連の講義や実習、ひいては次世代の教育者や実践者の育成に対して多大な教育的効果をもたらすものである。

第一に、カナダの先進的なアウトドアセラピーやPlace-Based Educationの知見は、従来のスポーツ、レクリエーション、あるいは自然科学的知識の習得に傾倒しがちであった野外教育のカリキュラムに、新たな次元を付加する。自然環境を人間のための単なる「リソース」として消費するのではなく、土地や自然と人間が根源的に不可分な存在であり、相互に癒やし合う関係にあるという「関係論的存在論（アニミズム的感性）」の視座を学生に提供することが可能となる。これは、現代の学生が地球環境問題や持続可能性（サステナビリティ）について深く思考し、実践していくための極めて重要かつ根本的な倫理的基盤を形成する。

第二に、指導法のパラダイムシフトによる教育効果の飛躍的な向上である。「因」としての個別の実践目標（技術習得や社会性・リーダーシップの向上など）を追求するだけでなく、その活動の背後にある「地」としての「アニミズム的感性の醸成（受動性と能動性の往還）」をすべての実践で目指されるべきメタ目標として設定するという枠組みは、今後の野外教育

指導者の在り方に革新を促す。指導者自身が地域の風土や文化と真摯に対話し、学習者の知覚を開き、自然からの「不意の気づき」や「畏敬の念 (Awe)」、「驚き (Sense of Wonder)」を受け止める体験をファシリテートするような関わり方を磨くことで、単なるスキルの伝達にとどまらない、学生の存在論的な変容をもたらす教育実践の実現が射程になる。

第三に、地域連携への波及効果である。論文「野外教育実践が拓く大学と地域の連携」で提示した生態学的な視座を用いることで、大学と地域社会が協働して行う野外教育において、その土地固有の歴史、生態、文化の多層的な意味を統合する新たな教育プログラムの開発が促進される。これにより、大学における教育活動が地域社会の活性化や持続可能なコミュニティの形成にも実践的に貢献できると期待される。

以上のように、本在外研究は野外教育学の理論的基盤を根本から更新するものであり、研究・教育・社会貢献の各方面において極めて意義深い成果を収めることができた。